

水上勉全集

1

水上勉全集 第一卷

昭和五十一年六月一日印刷
昭和五十一年六月二十日発行

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷者 白井倉之助

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九七六

目次

雁の寺(全)	3
案山子	315
桑の子	335
盲いの人	353
棺	377
美濃のお民	399
うつぼの筐舟	435
あとがき	481

雁
の
寺
(全)

第一部	雁の寺	5
第二部	雁の村	108
第三部	雁の森	168
第四部	雁の死	246

第一部 雁の寺

一

鳥獸の画を描いて、京都画壇に名をはせた岸本南嶽が、丸太町東洞院の角にあった黒板塀にかこまれた平べったい屋敷の奥の部屋で死んだのは昭和八年の秋である。

老齡に加うるに持病のぜんそくがひどかったせいもあって、蟻螂のように瘠せた南嶽の晩年は意志だけが生きのこっているように思えた。死なはる時はまるで虫喰いの枯木が倒れたようだった、と居合わせた弟子たちが口ぐちにいったほどだから、精力家としても知られ、女あそびも人一倍だった生前を知っているものにとつては、殊更、南嶽の死際がそのように思われたのかも知れない。彼は一昼夜、大いびきをかいて寝ていたが、最後は、やはり咽喉をならし、苦しみもがいて死んだ。南嶽は六十八であつた。

岸本南嶽が死んだ日の前日、正確にいうと十月十九日のことであつた。夫人の秀子がちよつと外へ出た留守に、見舞かたがた立ち寄つたといつて、衣笠山麓にある孤峯庵の住職、北見慈海が訪ねてきた。和尚は首に白絹布の護襟をまき、黒の被布をきて、どこかの回向の帰りとみえ、裾

から紫衣しゐの襷ひだをのぞかせていた。

「どうや、どんなあんばいや」

慈海和尚は、玄関に出た顔見知りの女中にそんな言葉をあびせながら、つかつかと入ってきた。と、そのとき、うしろに、まだ十二、三歳としか思えない背のひくい小坊主こぼうずが立っていた。この小坊主も和尚の後ろを上ってくる。

岸本家は、孤峯庵だんかの檀家だんかであった。名譽総代にもなっていたから、和尚がこうして奥の間にさっさと通つても不思議ではないのだが、折から、枕元まくらもとに坐っていた弟子たちの中で、病人の口もとを水綿すいめんでしめらせていた兄弟子の笹井南窓ささいが、ちよつと氣に病んだ。縁起でもないと思つたのである。師匠はいま虫の息で医者から見放されている。そこへ、菩提寺ぼだいじの和尚の来訪だった。南窓は、皆にしぶい顔をしてみせた。女中が、茶菓をとり廊下へ下つてゆくと、弟子たちの顔色をまるで無視するように、慈海は風をたてて枕元に歩みよつて、臥ねている南嶽の顔をさしのぞき、

「どうや、どんなあんばいや」

とまたいった。その声はたかかったので、ひくい天井にはねかえつて、襟もとまですっぽり絹蒲きぬぶ団たんをかぶつて朽木くもきのようにねていた南嶽の耳を打った。南嶽はとじていた臉おもてをうつすら半ばらきにあげると、

「和尚おつさんか」

と、苦しそうな声をだした。

これは、わきにいた弟子たちを驚かせた。朝から南窓がいくら師匠の名をよんでも南窓はだまっていた。それなのに、いま乾いた口をわずかにひらいて南窓はかすれ声でいったのだ。

「来てくれると思うとった」

「いやな役目やな」

和尚は、ずんぐりした肩を落して南窓の顔をさしのぞいてから、横柄な物言いでいった。

「わしは、あんただけは迎えにきとうなかった」

そういうと、広い十畳間に南窓と三人の弟子が坐っているのを、はじめてみるような眼つきで見廻して、不意にケラケラ笑いだした。笑い終ると、先程から縁先に立って、じっと庭の色づいた蔦のからみついてゐる石燈籠に見入っていた小坊主をよんだ。

「おいおい、慈念」

小坊主は、びくっと肩をうごかした。首だけこっちへ廻して部屋をみている。剃っているので、頭の鉢の大きなのがへんに目立つ子である。額が前へとび出ている。ひどい奥眼なので顔がせまくみえる。

「こっちへおいで」

慈海和尚は手招きした。小坊主は畳のへりをよけて静かに歩きだした。擦るような歩き方である。

「慈念いうてね。昨日、得度式がすんだ。庭もきれいに掃除してくれる。ようなら、いっぺん寺へあそびにきてもらわねばならんの」

立ち寄った理由は、これであつたか、侍者じしゃを育てることになつたあいさつのようなものだったか。南窓はつるつるに刺つた大きな頭の小坊主の横顔をじいっとみつめていた。ずいぶん陰気な小僧を入れたものだなと思つた。禅寺で小僧が得度式をあげた場合、これを檀家総代に披露ひろうするのがしきたりだったのである。

和尚はやがて枕もとから踵きびすをかえして縁の方に歩きだした。と、このとき、南嶽がまたかすれ声をだしていった。

「和尚さん、さとを頼たのみますよ。あれは、孤峯さんの娘や」

そういつたかと思うと、臉を閉じた。声をだしたのがわるかつたとみえて、南嶽ははげしく咳せきき込みはじめた。南窓がにじりよって、湿綿を口に何どもあてた。

和尚は、その有様をふりかえってみていた。大きく会釈えしやくしながら見下ろしていたが、そのとき南嶽の顔はもはや草色であつた。

「大事にな」

いい置いて、ほんの四、五分間のやりとりであつた。慈海は得度式がすんだばかりの小坊主の頭を一つ撫なでると、小股歩こまたをきにせかせかと岸本家を退去していった。

翌日あしたで、南嶽はひと言も口をひらかなかつた。大いびきをかいて苦しうに咽喉をならしていたかと思うと、それが急にとまって息をしなかつたりした。息をひきとるときは、口をかすかにあけた。何かいったようなので、弟子たちはのぞきこんで耳をかたむけたが、「さと」ときこえたようであつた。

弟子たちは枕元の夫人秀子の方をみた。秀子は袂^{たもと}を顔に押しあてて、むせび泣きはじめていた。きこえないらしかった。

南嶽が死ぬ間際にたのんだ、さといふのは桐原里子のこと、南嶽が上京区の出町の花屋の二階に囲っていた女である。木屋町の小料理屋につとめていたのを、南嶽がひっこぬいて晩年入りびたりになった相手であるが、この女のことは弟子たちも、慈海和尚もよく知っていた。三十二だが、小柄で、ぼちゃっとしており、胴のくびれた男好きのするタイプで、かなり美貌^{びび}であった。なぜ、南嶽がこの里子のことを慈海に頼んだか。考えてみると理由がないとはいえない。

健康であつたころの岸本南嶽は、遠くは中国にも、欧州にも旅をしたけれど、念の入った大作となると、いつも孤峯庵の書院を借りて仕事をする習慣だった。衣笠山周辺から落葉樹林のある寺のあたりが好きだったらしく、ここが、晩年のアトリエになっていた。十年ほど前のことだが、南嶽はひと夏じゅう仕事もしないで孤峯庵の書院で暮らしたことがある。そのとき、つれてきていたのが里子であつた。

「これはな、わしの描いた雁^{がん}や」

里子をつれて、孤峯庵の庫裡^{くらり}の杉戸から本堂に至る廊下、それから、下間^{げかん}、内陣^{ないじん}、上間^{じやうかん}と、四枚襖^{ぶすま}のどれにも描かれてある雁の絵をみせて歩いた。

襖は金粉がちりばめてあつた。根元の大きな古松が、池に匍^はうように大きく枝をはっていた。針のような葉が一本一本克明に描かれていた。雁のむれは、その下枝にとまったり、羽ばたいたりして宿っていた。とび立ちかけて白い腹を夕空に輝かせている一羽もいるかと思えば、松の幹

の瘤こぶの一部のように動かずにすくんでいる一羽もいた。子の雁もいた。口をあけて餌えさを母親からもらっている雁もいた。それらの幾羽とも知れない雁は、墨一色で描かれていたが、一羽として同じ雁ではなかった。画家が情熱をこめて、一羽一羽に念を入れて描いていった筆の音がきこえるようであった。雁は生きているかにみえた。

これは南嶽がその年のまだ二年ほど前の春、精根かたむけて描いたものであった。本人が自慢しても、はばからないほど卓すくれた絵である。

「わしが死んだら、ここは雁の寺や、洛西らくせいに一つ名所がふえる」

酒気をおびていたので南嶽は、里子の首すじに手をやりながら微笑していった。

「啼なき声がきこえるようやわね」

と、里子は本堂のうす暗い光りの中で恍惚こうこうとつぶやいた。南嶽は微笑しながら、そんな里子の首すじをいつまでも弄もてあそんでいた。

死んだ南嶽が、慈海和尚に里子を託したのは、この夏のこと忘れられなかったからであろうか。

事実、よく書院で三人は酒を呑のんだものである。慈海は南嶽より十歳も若かったが、南嶽に似て精悍せいかんな軀からだと顔かほをしていた。里子とも性が合った。

「和尚さん、耳の穴の毛けだけはぬいとくれやすな」

里子が酔いのまわった眼をほそめてそういうと、慈海は笑って二人をみつめている。その眼には好色な光りが宿とどっていた。慈海には妻はなかった。よく里子は南嶽に、

「和尚さんの眼エがこわい」

といった。慈海が自分を好いていることを知っていたのだ。

慈海も南嶽も、好みが一致していた。女も酒もすべて話が合った。南嶽はいつまでも慈海が妻帯しないことに不満らしかった。孤峯庵は燈全寺派の別格地だといっても、本山塔頭の寺院でさえ、すでに匿女は大びらであった。庫裡の奥に、どの寺も女をかくしていた。好色でもある和尚が独身を守る理由がないと面とむかつて南嶽はいったものだ。しかし、慈海はへらへら笑って相手にしない。しつこく南嶽がいうと和尚はこういった。

「髪を断ずるは愛根を断ずるなり、禪家の剃髪の趣意じゃがの」

初七日がきたとき、桐原里子は喪服を着て、細い白い腕に褐色の瑪瑙の数珠をはめて孤峯庵の門をくぐった。この日は曇り空で、風があった。小松の茂った衣笠山は、盆を伏せたように煙っていた。なだらかな裾一円は、すっかり葉の疎らになった落葉樹林にかわっていたが、山の赤い地肌のすくえてみえるあたりに、紅葉した楓がいくつもはさまれて映えている。

孤峯庵には、山門のわきに鉄鎖のついた耳門があった。里子が草履の音をさせて入ってくると、この鉄鎖はキリキリと音をたててあたりの静寂を破った。応対に出たのは、里子には初対面の慈念である。鉢頭の大きな、眼のひっこんだ小坊主は、少し長目の青無地の袷をきて板の間に膝をついていた。それが庫裡の煤けた柱を背にしていやに大人っぽくみえる。里子はちよっと途惑った。

「出町がきたと和尚^{おつ}さんにいうとくれやす」

里子は、上りはなの踏石に立って、そういった。

「はい」

慈念はすぐ隠寮^{いんりょう}の方に下ったが、まもなく、奥から廊下を歩く早足の音がして、白衣^{びやくえ}の衾^{あわせ}に角帯をしめた慈海が出てきた。

「あがんなはれ、あがんなはれ」

里子は、なつかしように和尚をみた。むっちりとした里子の軀はいつものとおりしゃきしゃきしていたが、顔だけは思いなしか心もち蒼く澄んでみえた。そんな里子をみて、慈海和尚は喜悅の声をあげた。和尚は里子を書院に通した。そこは、里子にも思い出の部屋であった。南嶽の葬式は、すでにここですんでいた。築山^{つぎやま}と池のみえる静かな部屋である。里子は掌^てを畳について臉をうるませていった。

「和尚^{おつ}さん、お久しぶりどす」

里子は、南嶽の葬式に列席するわけにはゆかなかった。出町の花屋の二階でその死を知り、葬式の日取りも知ったが、一人で故人を偲^{おも}んでいたという意味のことを語った。

「早^はよおまいりしたい。和尚^{おつ}さん、あの人の雁の絵をみせとくれやす」

里子はあまえるようにいい足した。

本堂に案内され、やがて里子は打敷^{うちしき}のかかった戒壇の上に、まだ新仏の位牌^{いはい}が特別に飾られてあるのをみて息をつめていた。

秀嶽院南燈一見居士

慈海がつくった院号の戒名であった。岸本南嶽はいま、一尺たらずの短冊型の板にその軀をちぢこめて立っていた。

里子は香を焚いた。十畳ほどの内陣は香煙で白くなり、煙が畳の上にたゆたいはじめると、南嶽の描いた襖の雁が、霧の中で動きはじめるように思われた。美しい雁であった。里子はふと、南嶽が成仏しただろうと思った。

下間の襖の中央部に、白い腹毛をふくらませた二羽の雁が目についた。その一羽は松の窪みにちぢこまって一羽の雁の脇下を嘴でくすぐっていた。里子はいつまでもその襖絵をみていた。と、このとき、慈海がうしろからいった。

「さ、あっちへゆこ、いっぱい薬酒をさしあげよう」

慈海はうきうきしていた。里子は隠寮の六畳にはじめて通った。そこは慈海の部屋であった。膝をついて、座蒲団を出してくれる小坊主を顎でしゃくった慈海は、里子にいった。

「これがの、わしの女房がわりや、慈念いうてのう、ついこのあいだ得度したばかりじゃの」慈念はぺこんと頭を下げ、ひっこんだ奥眼をきらりと光らせて、里子をみていた。やがて、はにかんだように、さっと顔を伏せ、足早に去っていった。

「玄関ではじめてみたとき、びっくりしたわ。妙な子供さんや思うて……いくつ？」

「十三や」

「へーえ、学校は？」

「大徳寺の中学校へいっとる」

「和尚^{わう}さんの跡取り？」

慈海は、里子の顔をみただけで返事をしなかった。うしろの仏壇の下の小襖^{こぶすま}をあけに立った。一升瓶^{びん}の酒が幾本もみえる。その中から沢之鶴を出して、

「今日はこれをあけよ」

そういうと、慈海は子供のように頬^ほをほころばせて手をたたいた。慈念が顔を出した。

「熱燗^{あつかん}でもってきてくれんか」

慈念は瓶をかかえて廊下に消えた。顔に似合わず小まめに働く子供だと里子は思った。膳^{ぜん}の用意をして、徳利^{とく}と盃^{さかずき}を運んでくる。里子をはじめ、慈念の顔をみたとき、変になじめないものを感じた。しかし、見馴^{みな}れてくると、頭の大きなこの子がいじらしくさえなってくるのは妙だった。「えろう働かはる子や、ええ小僧さんもちなはった」

酔^よってくると里子は慈海にいった。

里子は久しぶりに呑^のんだ。ひどく廻りが早かった。夜になった。よく南嶽も入れて、三人で呑みあかしたこともあるから、里子は落ちつけた。

「わしは南嶽からたのまれたぞ」

慈海がそういったとき、里子は黒眼の大きな慈海の瞳^{ひとみ}にキラリと光りが宿るのをみた。

「あんたの面倒をみてくれといひよった。あの男は、わしがあんたを好きなことをよう知^しった。あんたはきてくれるかの」